

---

# 幸せな夫婦

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

幸せな夫婦

### 【Nコード】

N7772C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

戦争が終わって十年近く経った大阪。そこに住む女房芳香は今日も亭主や家庭の為に尽くす。やりくりをして暮らす夫婦の幸せは。昭和の一時の大阪のお話です。難波や天下茶屋を御存知の方は是非御覧下さい。

## 第一章

### 幸せな夫婦

できた女房という存在がある。これは一口に言っても中々いはいない。もっともその逆のできた旦那というのはもっと希少価値であるかも知れない。

昭和の二十年代終わりの大阪。天下茶屋に秋元芳香という女がいた。これが所謂過ぎた女房と評判だったのだ。

何がいいかと言えはまず顔がいい。これが最初に大きかった。それだけでなく身体つきもいい。和服の上からその姿がはつきりとわかる。実に艶かしい。その顔も絶妙に奇麗で妖しく色香漂うものだった。黒髪を上でまとめてそのうなじがこれまたそそるといふものだった。肌は白く紅い唇を見事に映えさせていた。

それで終わりではなく性格もいい。慎み深く夫を立てるし貞節だ。物語にあるような女であった。

おまけにやりくりも上手くて料理もできる。何も悪いところはない。よくもまあこんな女がいたものだと感じしてしまう程だ。そうした女であった。

その彼女が今日傘を持って道の往来で世間話に興じていた。相手は昔から馴染みの静江という女だ。彼女も結婚してもう子供が結構いる。彼女は彼女でおおらかでできた女だが評判は芳香程ではない。それでも嫉妬を覚えないのは静江の得ではあった。

「それでや。この前やけれど」

静江は芳香に笑いながら話をしていった。その大きな口をさらに開いて言っていた。

「道頓堀まで言って」

「何してたんや？」

「旦那と善哉食べたんや」

「あんたの旦那お酒飲むんちゃうん？」

「それでも甘いもんもいけるんや」

静江は笑ってこう述べた。

「特に善哉は好物なんや、うちの人」

「行ったんは夫婦善哉やな」

「わかるん？」

「わかるで、それは」

芳香は笑って静江にこう返した。

「道頓堀の辺りでええ善哉のお店いうたらそこしかないやん」

「まあそやな」

「そやからわかるで。それで夫婦で一つずつ？」

「いや、二つやで」

静江は笑って言うのだった。

「お互い茶碗を一つずつ交代してや。それでや」

「そうやったんか」

「そういうことや。旦那も美味しい美味しいって食べてな」

「美味しいやろ、あそこ」

芳香もにこやかに笑っていた。艶やかな顔が少女のそれに見える。

「量もあるように見えて」

「あるんちゃうん？」

静江はその言葉に目を丸くさせた。おっとりした目がほんの少しだけ驚いた感じになった。

「うち二つ食べてもうお腹一杯やったで」

「そう見えるだけやねん」

芳香はそう言って笑うのだった。

「ええ？これってコツやねん」

「コツ？」

「そや。ほら、一つのお皿や御椀に入れると寂しいやん」

彼女は静江に対して語る。

「それをな。二つにすると一杯あるなって思って。そういうことな  
んや」

「そうやったんか」

静江はそれには少し驚いた。言われてみればそうだ。そういうやり方もある。そうした意味である店はよく考えているものだと思う。実はこの値段でこれだけ食べられるのだから贅沢だとも思ったりしたのだ。

「何でもそやで」

芳香はその子供っぱささえ見える顔でまた言った。

「多く見せるにはコツがあるねん」

「そやったんか」

「そうやで。おかずかて同じや」

主婦の話題の中心にきた。やはりその日のおかずが何なのかが最も重要なのだ。それを考えればここに話が至るのも当然と言えば当然であった。

「一つのもんを一つのお皿に出すより」

「二つにする」

「それは何でもええねん」

そう付け加える。

「どんなしよぼくれたお味噌汁でもな。あるとないのとで大違いやで」

「そうやったんか」

静江はそれを聞いて感心すること至極であった。

「そうすればよかつたんか」

実はおかずが少ないと結構亭主に言われたりするのだ。しかしこれで大きく違うと思った。本当に目から鱗が落ちる思いであった。

だが芳香の話はこれで終わりではない。さらに言うのだ。

「お味噌汁の具もな」

「どんなんでええんや？」

「残りものを入れたらええんや」

「残りものなん？」

「大根の葉っぱとか昆布の残りとか」

案外見ているようで見ていないものだ。それを言ってきたのだ。

「そういうのでええねんで。いや、それでかえってええんや」

「かえってなん」

「そや。大根の葉っぱなんてあまり見たりせえへんやろ」

「まあそやな」

少し前までは食べるものが何もなく何でも食べていたがもう戦争から十年近く経っている。だからそういうものを食べるのも次第に忘れてきていたのだ。

「大根自体はともかく」

「そういうことやで。おかずかてな」

まだ話が続く。

「一度にようさん作るんや」

「何日も食べる為やるか」

「それもあるけれど他にもあるんや」

まだあるという。彼女の目のつけどころは中々様々に至っている。

「一度にようさん作った方が味がええ」

「そうなんか」

「特にカレーはそやで」

といつてもこの時代はカレーに肉が入っていればご馳走である。

よくて豚肉といったものだった。肉そのものが非常に貴重な時代であったのだ。これは昭和五〇年代までそうであったであろうか。

「一度にようさん作るんや。味も出るしな」

「ほなうちも明日からそうするわ」

静江はおっとりした調子で言った。

## 第二章

「ゆっくりとな」

「静江ちゃん静江ちゃん」

しかし芳香はここで静江に直接言ってきた。

「どうしたん？」

「明日からやないで。今日からやん」

「あつ、そうやった」

それを突っ込まれて笑う。おっとりとした調子であった。

「そやったな。忘れてもうてたわ」

「そこもやるとええんよ」

すぐにアドバイスを入れてきた。

「思い立ったが吉日やで」

これもまた秘訣だった。芳香はそういうこともわかっていたので。

「じゃあしっかりやりや」

「わかったで」

静江はにこりと笑って彼女に応える。

「そしたら今日から」

「うん」

「おおきにな。感謝するで」

「ええつて。こんなんは」

笑ってそう返す。完全に幼馴染み同士の顔になっていた。

「お互い様やで」

「お互い様なん」

「そや。そやから気にせんとき」

「そのにこやかな顔で返す。」

「折角今も生きてるんやしな」

空襲のことだ。この辺りも爆撃を受けているのだ。戦争の記憶がまだ人々の心に残っている、そんな時代だったのだ。復興はしたが

その名残も残っていたのだ。

「楽しくいかな」

「相変わらずやね、よしちゃんは」

幼い頃の仇名で彼女を呼んだ。

「そういうところは」

「そやるか」

「そやで。旦那さんも大事にしや」

静江は笑ってこう声をかけてきた。

「そうしたらええことあるからな」

「ええことなんか何時でもあるで」

また笑って言う。

「毎日な。何かあるもんやで」

これも彼女の考えだった。かなり前向きなのでこうした考えができるのだ。何かにつけてできているのが芳香という女性であったのだ。

「そやからな」

「そか。じゃあ楽しくいけばええな」

「そうそう。ほな今から」

「買い物やな」

ちらりと芳香の手にある麻の買い物籠を見る。今ではなくなったものだ。こうしたのも時代と共になくなった。それを懐かしむか時代の発展と見るかはそれぞれであるが。

「今日は鯛しよ思うねん」

「メザシやな」

「それかたいてな」

煮るということだ。関西ではこう表現したりする。

「たいたら男の人食べへんのちゃうん？」

静江はふとそれを問うた。どういうわけか煮魚というものを嫌う男が多い。煮魚は煮魚で美味しいものであるが。

「それも工夫やねん」

「工夫なん」

「うちの人の舌はわかってるさかい」  
笑って述べる。

「そやから」

「その後でうちにも教えてな」

静江は彼女が何をするのかはわからなかった。しかしそれを後で  
知りたいと思いきう言ったのだ。

「ええで。ほな一緒に行く？」

「一緒に？」

「一緒に行つたらついでに教えられるやん。だから」

「じゃあ商店街まで一緒やな」

「そこでごぼ天安かつたらそれも買つて」

これも関西ではポピュラーな食べ物だ。南海線のすぐ側にある商  
店街によく売られている。二人はその商店街に行くつもりなのだ。

やけに細長く何処までも続く商店街でかつては闇市であった。

「それでおかず二つ」

「あとはお味噌汁。そこにお漬物があるから豪勢やね」

「安くしてもご馳走はでけるねん」

真理であった。

「それをやりくりするのがまた楽しくてや」

「ほんま凄いわ、そいうのって」

静江はまたしても感嘆の言葉を漏らす。芳香のそのやり繰りに感  
服しているのだ。

### 第三章

商店街から帰ってすぐに支度をはじめ。幸いごぼ天は安く手に入り鯛もかなり大きいのを買うことができた。それをたいて子供達を外で遊ばせていると亭主の康友が帰って来た。眼鏡をかけた几帳面そうな顔だ。スーツが実によく似合う、そんな男だった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「ああ、今日は鯛か」

玄関に帰ると玄関のすぐ側の台所で料理をしている女房を見た。割烹着で手際よく料理をしている。

「この匂いは」

「そうよ。たいてるで」

「というとおれか」

康友は芳香のその言葉を聞いて顔を晴れやかにさせてきた。

「生姜を入れてるんやな」

「そうや。それもたっぷりとな」

「ええな、それって」

康友は生姜が大好物である。それで今の言葉を聞いて顔を晴れやかにさせたのだ。

「あんたが好きやからやで」

芳香はにこりと笑って亭主に顔を向けて述べた。

「だからや」

「丁度生姜を食べたいと思ったところや」

そう答えながら背広の上を脱ぐ。玄関からあがつて服を脱ぎ一旦猿股だけになる。そこから和服を着てくつろいだ姿になってちゃぶ台のすぐ側に座って話を再開させた。

「わかつたんか」

「何となくやけどな」

そう答える。

「それにあれやろ。晩酌にも合うし」

「ああ」

彼は煙草は吸わないが酒は飲む。日本酒もビールもあるものを飲む。しかしそれを飲んでいくからといって身体を壊すこともない。芳香が家にある酒の量を調整しているからである。そうしたところにまで気を配っているのだ。康友はこれには気付いていない。

「その通りや。飯にもええしな」

「だから鰯にしたんや」

康友に対して語る。

「そうしたことを考えて」

「それだけじゃないみたいやで」

康友は新聞を読みながら芳香に語ってきた。

「他にもあるんか」

「ああ、新聞に載ってるけれどな」

そう女房に語る。

「カルシウムとかそういうのが一杯あって身体にめっちゃええそうや」

「ああ、そうやったん」

「そうらしいで。他には秋刀魚とか鯖とかも身体にええって書いてる」

そうしたこととも広まってきていた時代であった。新聞や雑誌に何の食べ物がいいかとかそうしたことが話題になり続けていた。無論鰯もその中に入っているのだ。

「米は……何やこれ」

新聞の中を見て眉を顰めさせていた。

「先進国は皆パンだとか。東大の教授様か」

「パンがどうかしたん？」

「馬鹿馬鹿しい。米が一番に決まっとるわ」

そう言って新聞を閉じてきた。

「パンを食べれば頭がよくなるとか書いとるで。アホな教授がおる

もんや」

「あら、東大の先生やのに」

「東大で先生やっとしてアホはアホや」

康友はこう言い捨てた。

「新聞書いとる奴もや。アホはアホで人間が腐つとるのは腐つとる」

「何かあつたん、あんた」

「何かあるから言うんや」

ふてくされて一人勝手にビールの栓を開けていた。

「ちよつとやるで」

「ええ」

「全く。ソ連がええとか北朝鮮がええとか」

その開けたビールを腹の中に入れながら愚痴を言いはじめた。

「何をどうやったらそんなアホなことが言えるんや。あいつ等は獣  
「や」

半ば罵倒していた。

「ゴロツキか犯罪者の集団みたいなもんや。そんな奴等を何で褒めるんかわからん」

実は彼は戦争では満州にいたのだ。彼は何とか逃げ帰ることができたのだがそこでソ連軍と戦いその暴虐な有様も見ていた。だからソ連がとことんまで嫌いだったのだ。

「それでわし達が遅れているか。ふざけるのもいい加減にせんかい」

「世の中おかしなことを言う人もおるんやね」

「戦争が終わってから急に増えた」

彼はこう言う。

「変な世の中になつたわ。子供達には間違つてもな」

苦々しげにビールが入ったコップを持ちながら述べる。

「あんな奴等を仰ぎ見るようにはしたくないもんや」

「真つ当にすることやね」

「そや」

それが彼の信念だった。

「ソ連とかあんな奴等よりも自分を信じればいいえんや。そうやないかい？」

「そうよね、やっぱり」

鍋の中の鰯を箸でさばいて味噌汁の様子を見ながら言う。大根の味噌汁であった。

「まともにしないとね」

「まともなのが一番や」

話しているうちに不快の虫が収まってきていた。次第にその関心を夕食に向けてきていた。

「それで味噌汁はあれか」

「ええ。大根の葉っぱやで」

「やっぱり意外とええな」

康友は言う。

「最初は何やと思っただけれどな」

「意外とええやろ」

夫の言葉ににこりと返す。

「大根の葉っぱも」

「そうやな。食べると美味しいもんや」

康友もにこりと笑う。笑いながらまたビールを飲む。

「意外やったな。こんなの何処で見つけてきたんや？」

「思いつきやで」

「そうなんか」

「そやで。けれど意外とええやろ」

にこりと笑って夫に言う。もう料理はかなりできてきていた。

「大根も」

「そうやな。それであれもしてくれや」

「鯨やね」

「ああ、ええよな」

この時代は鯨はごく普通の食べ物だった。醤油や生姜と一緒に煮たりしてよく食べられた。かつては日本人の主要なタンパク源であ

ったのだ。

「鯨の可口と菜っ葉でな」

所謂ハリハリ鍋だ。この頃は安く普通の食べ物であった。大阪では有り触れた食べ物だったのだ。鯨がそうであったからこれは当然である。

「またやってくれや」

「子供達があまり好きやないけれどね」

それが芳香には少し不満だった。

「鯨の可口も」

「あんな美味いものないのにな」

康友は首を傾げて言う。

## 第四章

「ベーコンとかな」

鯨のベーコンもかつてはごく普通の食べ物だった。牛肉なぞよりも遥かに安かった。そうした時代だったのだ。鯨はご馳走でも何でもなくどの部分も食べられるものだった。

「まあ何時でも食べられるしそんなにきつう言うことはないか」  
「そうやね」

「まあまたそれしてくれ」

「ハリハリ鍋？」

「ああ、それかベーコンな」

「ここでビールを見る。」

「酒にも合うしな」

「好きやね、本当に」

「好きやで」

酒を好きなのを自分でも認める。だがこれで言葉を終わらせなかった。

「けれど一番好きなのはな」

「何？」

「御前や」

「あら、言うわね」

その言葉にくすりと返す。

「お世辞を言っても何も出えへんで」

「おいおい、冷たいな」

言葉の調子が少し砕けてきた。二人はそんなやり取りも楽しんでいていた。

「折角言つたのに」

「私は厳しいにやで」

「ここは締めてきた。」

「そんな言葉やったら」

「冷たいもんやで」

康友はふとこう言って笑ってきた。

「昔から」

「そうやるか」

芳香もそれに合わせて言ってきた。

「今自分で言つたやるが。それより」

「子供等呼ばなな」

「そや。はよ食べよで」

そんな話の後で子供達を呼ぶ。こうして話を終わらせて夕食に入るのであった。

芳香はそんな日常を過ごしていた。この日もそうだった。

「このままいけるで」

ある朝康友は背広姿で朝飯を食べながらちゃぶ台で新聞を見てにここにこしていた。見れば毎日新聞である。

「南海の優勝や、日本一や」

「三連勝したんやつたな」

「そや、ほれ見い巨人のこの写真」

新聞の記事を指差して言う。

「惨めなもんやで。負けてな」

「水原さんやね、この後姿」

「ああ」

芳香が指差した男を見て応える。

「その通りや。しかしあれやな」

「どないしたん？」

「水原の背中つてのはあれやな」

ふと感慨を込めたように言う。唸ってすらいる。

「哀愁があるわ」

「そうなん」

「巨人は嫌いやけれどな。この背中はええ」

そう言つて唸るのであつた。

「何か哀愁があつてな。妙に絵になるんやな、これが」

この時の巨人の監督は水原茂である。名将と言われた男でこの時代に指導者として生きた男独特の凄味も持っていた。慶応では早稲田との衝突を潜り抜け戦争ではシベリアから生還した。同郷で早稲田にいた三原脩とは宿敵の関係にあつた。三原もまた凄味のある男で縦横無尽の知略で知られたが水原はそれに対してバランスの取れた将だつたのだ。

「そやね」

「けれどまあ今回は勝たせてもらつて」

康友はニヤリと笑つて言った。

「今まで負けてばかりやつたからな。今度こそや」

「勝てるんやね」

「巨人が負けるんや」

南海が勝つとは言わないのがミソだつた。

「巨人が負ける。ええとは思わへんか」

「そやね。それはそうと」

ここで康友にそつと言つてきた。

「何や？」

「仕事やで」

そつ彼に言つてきたのだ。

「もつ」

「おつと、そやつた」

言われてやつと気付いた。

「もつか。じゃあ行つて来るわ」

「今日はどうするん？」

「野球か」

「どないするん、そつちは」

「ああ、ええわ」

笑つてこつ返した。

「もう勝ちが決まったしな」

「そうなん」

「あと一回勝てばええんやで」

笑ったまま言う。

「楽なもんやで」

「そやるか」

しかし芳香はそれには首を傾げてきた。

「どうなるかわからへんのちゃうん？」

「何言うとんねん」

しかし康友はその言葉を一笑に伏す。完全に南海が勝つと思っていた。

「ここまで来て負けるかいな」

「だといいけれど」

あえてここで止めた。強くは言わなかった。

「とびきりの酒用意しといてくれ」

「お酒やね」

「一級酒や」

それで祝杯にするつもりであった。南海が勝つ、そう思い込んでいた。その証拠にこうまで言うのだった。



「肝臓休めろってことかい」

「そういうことや。ええやろ、それで」

「ああ、わかったで」

妻のその言葉に頷いた。

「そやったらな。それで」

「お酒は勝負が決まった後でな」

「ああ」

女房のその言葉に素直に頷いた。彼はこの時南海の勝ちを確信していた。しかしそれは脆くも打ち破られたのであった。

それから巨人は三連勝したのだ。絶体絶命にあつた巨人は水原の腹を括つた若手投入により崖っぷちから盛り返し逆に南海を倒した。南海にとつては痛恨の敗北であつた。

康友はその話を最初に聞いた時我が耳を疑つた。だが事実だつた。彼は呆然と大阪球場を、そして御堂筋を眺めるだけであつた。

人が周りにいるがそれは見えなかつた。ただ灰色になつてしまつた球場と道を見ているだけだつた。もう何と言つていいかわからなかつた。

「負けたんやね」

「そや」

彼の横に芳香が来た。その言葉に頷く。

「まさかな。負けるなんてな」

「勝負やで」

うなだれる夫にこう言うのだ。

「負けることもあるわいな」

「けれどや」

それでも彼は言う。

「何でや」

顔を上げて出て来る言葉はこれであつた。

「何で負けるんや。あそこまで来て」

全ては水原の采配故だつた。やはり彼は名将であつたのだ。伊達

に野球以外でも多くの修羅場を潜り抜けてきたわけではない。絵になるスマートな男だったがそれでも勝負師だったのだ。なお彼はその鶴岡、宿敵である三原と並んで三大監督とまで謳われるようになった。非凡な男だったのだ。

「わからんなあ。ホンマに」

「だからそれが勝負やって」

芳香はまた彼に声をかける。

「気を落としたらあかんで。それにや」

「それに？」

ここで女房に顔を向けてきた。

「一番落ち込んでるのはあんたやないで」

「わしやないか」

「そうやない」

笑顔を作ってこう声をかける。

「選手に決まってるやん」

こう言うのだ。

「それと監督さんな。負けて一番辛くて悔しいのは」

「そつか」

「そうや。そやから」

また声をかける。

「気を落としたらあかんで。ええな」

「ああわかった」

そこまで言われて遂に頷いた。

「そやな。そやったら」

「気を取り直してな。飲んだらええわ」

「ああ、わかった」

まだ頂垂れていたがそれでも頷いた。

「そやったら」

「そうそ。じゃあ家に帰るで」

「家にか」

芳香のその言葉に顔を向けてきた。

「だからとびきりの酒買ってるって言つたやん。それで」

「買って来てたんか」

「勝つても負けてもな。必要やと思つて」

そう答えてきた。

「それでや」

「悪いな」

女房のその言葉を聞いてほろりとしかけた。しかし女房の前だったのでそれは止めた。この時代はまだそうした男の意地というものが少しではあるが残っていたのだ。

「ほな。帰るか」

「ベーコンもたっぷり買ってるさかいな」

「済まん。じゃあ今日は飲むわ」

「せいらい飲んだらええわ」

また夫に対して言う。

「今日はな」

「わかつたで。そやつたら」

「うん」

夫の背を支えるようにして御堂筋を後にする。彼は何とか女房の支えで持ち堪えた。その日はかなり深酒だったがそれでもその日だけで終わった。それも芳香のおかげであった。

## 第六章

「それはわかるで」

そのことを静江に話すところした言葉が返ってきた。二人は今喫茶店でコーヒーを飲んでいた。何処かハイカラな趣味を楽しみながらであった。

「うちの人も一緒やから」

「南海を応援しとるん？」

「阪神や」

だが静江の答えはこうであった。

「うちの旦那は阪神一本やりやで」

「そうなんか」

「そうやねん。けれどあれやろ」

コーヒーに砂糖を入れながら困った顔を見せてきた。

「阪神はずっと巨人と戦ってるやん」

「うん」

「負けるのも多いから。かなり大変なんよ」

「何であんなに阪神に打ち込むんやろ」

阪神ファンの熱狂はこの時代からだ。むしろ今よりもずっと激しい。何度も問題を起こしてきているし暴動のような事態になったこともあった。それが阪神ファンだ。

「阪神ファンって」

芳香にとつてはそれが不思議なようだった。顔を少し上にあげて

首を傾げさせていた。

「病み付きになるらしいで」

「病み付きなんか」

「そうや。阪神っていうのはな」

「お酒と同じなんか」

ふとこう言ってきた。

「それやと」

「むしろお米らしいで」

静江はそう答える。

「ないと困る。あつて自然なもんやで」

「自然なんか」

「そや。うちの亭主の言葉やとな」

「それやったらわかるわ」

芳香はその言葉に納得したように頷いてきた。

「それも白いお米やろ」

「そうやね。白いお米や」

やっとそれが何とか食べられるようになってきた時代であった。

なおこれがさらに豊かになっていく。しかしそれはまだ誰も想像だにできなかった。

「うちの亭主の言葉はな」

「うちの旦那もそうなんやろな」

芳香はここで康友についてそれを当てはめさせてきた。

「やっぱり」

「まあそやろね」

静江はその言葉に頷いてきた。

「応援してる球団はちゃうけどな」

「一緒なんやね、そこがちゃうだけで」

「阪神は特別やろけどな」

「ただしこう付け足された。」

「特別なんか、あそこは」

「阪神はかなりちゃうで」

「また述べる。」

「何か頭おかしいようなところがある。阪神だけやろな」

「そうなん」

「旦那さん南海やろ」

静江はそれを問うてきた。

「確か」

「そやけど」

実は芳香は野球に関してはそれ程詳しくはないのである。関西の私鉄がそれぞれ球団を持っていることは知っていたが。この時代は鉄道会社と映画会社が球団を持っていたのである。あとはマスコミだ。

「あそこも結構あれやで」

「怖いんか」

「それも目茶怖い」

静江は忠告するように述べる。

「阪神はセリーグやろ」

「うん」

流石にこれは知っている。阪神がセリーグにあつて南海がパリーグにある。流石にこれ位は知ってはいた。それ程詳しくはないにしろだ。

「それで南海はパリーグ。それぞれのリーグで応援してるチームが分かれてたりするんや」

「そついうもんなん」

「それでセリーグは阪神でパリーグはどつか、つてのが多いんよ」

静江はそう教える。これは本当のことでセリーグで応援する球団は阪神だがパリーグは違うということが今でもある。関西では南海の他に近鉄と阪急があつた。

## 第七章

この三球団は親会社同士の仲は非常によかった。当時南海は川勝、近鉄は佐伯、阪急は小林という名経営者達がいてそれぞれの沿線で会社を発展させると共に人々に大きな貢献を果たしていた。棲み分けをしていた関係もあるが彼等の仲は円満で関西の私鉄は半ばカルテル化していた程だ。

そのうちの一人佐伯はとりわけ凄かったと言われている。近鉄中興の祖と言われ彼なくして今の近鉄はなかったであろうとまで言われている。

それぞれの沿線で栄えていた関西の私鉄だがファンもその沿線に沿っていた。これは実際に親会社の思惑と宣伝によるものだが大阪だと河内が近鉄、摂津が阪急であった。そして和泉は南海だったのだ。天下茶屋は南海線なのでやはりパリーグは南海であったのだ。

「そやから大阪球場も怖いで」

「外から野次はよお聞こえるな」

「芳香もそれは知っていた。」

「そういえば」

「そやる？そういうことやねん」

静江もそれを言う。

「阪神の応援のまんまやから」

「だからうちの人も」

「あなたの旦那だけやないんや。南海のファンだけやないねん」

「他のチームのファンもかいな」

「凄いで」

こう言ってきた。

「関西球団同士の試合なんてなあ。試合より野次が凄いいんや」

今ではもうない光景の一つだ。大阪でも藤井寺でも西宮でもそうであった。応援よりも野次が凄かった。ファン同士野次というエー

ルを送り合っていた。それはさながら阪神ファン同士の罵り合いであった。実際にセリーグは阪神を応援していて甲子園では一緒なのだから当然と言えば当然であった。

「南海電車ではよ帰れ！」

「近鉄電車ではよ帰れ！」

「阪急電車ではよ帰れ！」

決まり文句だ。選手個人に対する野次も凄いものであった。今となつてはこれもまた昔の話だがそれでもこの時代は普通であったのだ。

「旦那さんもそやる」

「うちの人は普段はそうでもないんよ」

少し考えてから言う。

「阪神にはあんまり興味ないみたいやし」

「そうなん」

「そやけど秋の終わりになったら五月蠅いわ。シリーズで」

「そこやねん」

静江はそこを言ってきた。

「相手が巨人やろ」

「うん」

この時代はいつもそうだった。

「ここは関西やしな。巨人嫌いな人ばかりやし」

「それか」

「他にも色々あるみたいやけれどな」

実は南海と巨人の間には遺恨もある。巨人にエース別所を強奪されているのだ。目的の為に手段を選ばずその手段に溺れるのは今も変わらない。

「うちも巨人嫌いやしな」

「そういえば私も」

実は芳香も巨人は好きではない。むしろ何となく嫌いだ。

「そやる？巨人が相手の時は」

「そつと様子を見る」

「男の人にとっては野球がツボやさかい」

今度は静江が教えていた。芳香はそれをじっと聞いている。

「相撲とな。この二つだけは」

「注意して、やな」

「そういうことや。それじゃあんじょう」

「何か色々あるね」

「コーヒーカップを持ってから言う。」

「男の人も」

「芳香ちゃんわかってると思うけどな」

静江はにこりと笑ってそう返してきた。

「うちより」

「いや、今度は私が教えてもらったで」

彼女は笑って言った。

「野球のことは詳しいないから」

「相撲はどうなん？」

「そこそこやね」

こつ答えた。

「うちの人は相撲は見る位やし」

「他には空手とか柔道もあるけど」

「そつちは全然」

笑って左手を横に振った。

「興味ないみたい」

「最近柔道で面白い漫画があるらしいけれどな」

「子供が読んどるあれ？」

ふとそれを口にした。何処か軽く見ているのはこの時代漫画の評判がよくなかったからだ。少なくとも親達にとってはそつでそれが芳香にも出ていた。

こつもまた面白い。これより少し前は学生ではあるが哲学書を読むべきであり小説を読むのはけしからんとされていた。しかしこの

時代は漫画がけしからんとされていたのだ。子供はもつといい本を  
読めと。だから手塚治虫もそうした批判とつかの間の外れな中傷に苦  
勞していたりする。

「そやねん。うちの子供も読んでるみたいや」

「漫画っていうと手塚治虫？」

実際に彼は非常に名前を知られていた。戦後の、日本の漫画を形  
づけた異才はこの時は子供達にとっては神様のような存在で親達に  
とっては悪の権化であった。

「それとも赤胴鈴之助？」

「いや、それともちやうねん」

「じゃあ何やろ」

「イガグリくんって漫画らしいわ」

柔道漫画の古典である。今となっては何もかもが懐かしい漫画だ。

「イガグリくん」

「何かうちの子それ見て柔道やりたいって言うてるねん」

「ええんちやう？」

それは別に悪いとは思わなかった。

「つよなるし。躰にもなるし」

「じゃあやらせてみよか」

静江は考えながら述べた。

「柔道」

「そやね。うちの子も何かやらせてみよか」

「野球なんてどやろ」

その野球を出してきた。

「実際にやると遊びとはまたちやうらしいし」

「そうなん」

「スポーツは身体にもええし。やらせたらええわ」

「そやね、野球も躰にええし」

この時代はそうしたことが重く見られていた時代だった。まだそ  
ういうものが残っていたと言うべきであろうか。大阪の下町でもそ

れは同じだったのだ。

「そやったらやらせてみよか」

「うん、そうするべきやで」

静江はそう勧める。

「あと勉強もや」

「それなあ」

芳香はそれには少し首を傾げさせてきた。

「うちの子等は勉強でけるし」

「心配いらんってこと？」

「うん、そう思うんや」

そちらの心配はしていなかった。その分だけ気が楽ではあった。

「別にな」

「大学行ける位かいな」

「まだそこまではわからへんよ」

その問いには笑ってこう返した。まだまだ大学に行けるのは狭い門だった時代だ。大学という存在が高嶺の花であったのだ。

「まだな」

「それもそうか。けれど勉強がでけるだけええで」

静江は笑って言う。

「といつてもやっぱり一番ええんわ」

「健康やってことやな」

「そういうことやね。よお考えたらうちの子は二番目はやる時はやるし」

それは安心しているようだった。にこにことした笑顔が芳香に見せてきていた。

## 第八章

「柔道でえらい怪我さえせんかったら」

「ええね」

「それで最近やけどな」

「うん」

「テレビあるやん」

この時代そろそろ出て来た頃である。テレビがある家はそれだけで人が集まってきた。今では普通にあるテレビが夢の存在でもあった。そうしたふうになるうとしていたのである。

「あれええんやるか」

「凄いええらしいで」

それについても話をはじめた。

「何でも」

「欲しいなあ、何か」

「そやね」

そんな話もした。結局は世間話だったがそれでも芳香は色々と学ぶことはできた。そつと康友に子供に野球をやらせてみてはと勧めたり野球のことで気遣いを試みさせた。彼はすぐに機嫌をなおして野球を楽しみだしたがすぐに日常的に野球のことでは浮かない顔をする日々がはじまったのであった。

「またか」

朝の新聞を読んで溜息をつく日が多くなっていた。

「強いな、ホンマ」

そう言うのだった。それを聞いて新聞を覗くといつも南海が負けていた。

「どないしたん？」

「いやな」

康友は芳香の問いに不機嫌な顔を見せるのがこれまた常になって

いた。そしてその顔で言うのだ。

「西鉄になあ。負けて」

「ああ、西鉄に」

九州にあったパリーグの球団で西武の前身だ。この時野武士軍団と呼ばれ知将三原の下で荒々しい強さを誇っていたのである。

「豊田に中西、大下」

その西鉄打線の主軸である。とりわけ中西のバツティングは圧倒的であり球場を遙かに越えるホームランやショートの上を越えてそのままスタンドに入れたことや打ったボールが焦げていたとかそうした逸話の多い男であった。その仇名を怪童という。

「打たれたわ」

「それで相手のピッチャーはあの人やね」

「そや、稲尾や」

康友はこの名前を口にする時どうしようもない諦めを見せるのだった。抜群のコントロールと球威、高速スライダーとシユートを持っており何よりも桁外れのスタミナを持っていた。幾ら投げても平気な程だった。彼はその圧倒的なスタミナから鉄腕と呼ばれていた。彼が西鉄の柱だったのだ。南海は彼の前に手も足も出なかったのだ。

「あれはバケモンや」

稲尾を評してこう言った。

「勝てるもんやあらへん」

「打てへんのやな」

「しかもそれがいつも出るんや。どないすればええねん」

「それやったらこつちもその稲尾を入れればええやん」

芳香は頂垂れる康友をそう言って励ます。

「そやる？だから」

「稲尾をか」

それを聞いても頂垂れるだけだった。あんなピッチャーがそうそっいるものかと思ってしまうからだ。実際に稲尾は今でも伝説となっている。

「そつやん。南海も」

「おるかな」

首を傾げて言う。

「そんなんが」

「おるつて。絶対に」

「そうか。おるんやったら南海に連れて来たい」

何があつてもという感じだった。その顔で言うのだった。

「親分さんもそう思ってるやろな」

その南海の監督の鶴岡だ。今その名前を出す。

「ホンマに」

「今は我慢やで」

にこりと夫の顔を見て笑ったうえでの言葉であった。

「そやから」

「ああ、わかつたわ」

女房の言葉に励まされた。

「それやったら」

「ほな。気を取り直して行きや」

夫に会社に行くように声をかける。

「今日は勝つから」

「ああ。じゃあ今日は豆腐を頼むわ」

機嫌をよくして注文をつけてきた。彼の好物であった。関西では納豆は食べないが豆腐は他の地域と同じ位に食べていた。京都ではとりわけ湯豆腐が有名である。

「それでな」

「あとおからと」

豆腐の絞りカスだ。信じられない程安いかタダで売られている。今では少なくなつたしウサギの餌にもするがこの時代はまだ多く売られていたのだ。

「揚げでええか」

「御馳走やな。じゃあ頼むわ」

「わかったで」

夫を励まして送る。そうした日々が続いた。  
このことをまた喫茶店で静江に話す。すると彼女はまた言っ  
つた。

「苦労してるんやね」

「いつもそう言うんやけれどな」

芳香は少し困った顔で述べる。

「それでもなあ」

「骨が折れるやろ」

「折れる折れる」

苦笑いと共に述べる。

「大変やで、ホンマ」

「阪神も大変やけどそっちも大変やねんな」

「阪神も負けまくってるそつやん」

芳香は静江に尋ねてきた。

「何でも」

「そつやねん、それも巨人に」

静江も苦笑いを浮かべて述べる。

## 第九章

「ボロ負け続きやで」

「こっちはそれ程でもないかもな」

芳香は彼女の言葉を聞いてふと振り返った。振り返ってみると阪神程酷い有様ではないのかも知れないと思った。少なくともあの家騒動はなかった。阪神名物はお家騒動だった。それはこの時代とわりわけ酷かった。何かあるとすぐに選手や上層部、ふろんどが衝突を繰り返す有様だったのだ。

「まだ」

「それはええことや」

静江は芳香の話聞いて言う。

「うちの亭主もうそれでうんざりしてるどころもあるから」

「まあそやるね」

「それでも応援は続けてるけど」

かといって止めるようなら最初からファンにはなってはいない。

阪神ファンとはそうした人種である。それもこの時代からなのである。

「そうなん、やっぱりね」

「そやけど。そっちも大変やね」

「なるようにしかならんけどね」

「そorzaね、結局は」

結論はこれであつた。なるようにしかならないのだ。芳香はそれがよくわかつていた。何処か達観もしていたのである。それを実際に言ったのだった。

「ゆっくり待つわ」

「南海が優勝することやね」

「凄いエースが来てな」

にこりと笑って言う。

「何か西鉄に凄い人おるらしいけど。ええと」

「稲生和久やる」

静江はにこりと笑ってその名前を出してきた。

「西鉄いうたら」

「そう、その人」

芳香はその名前を聞いて言ってきた。

「その人に随分やられてるらしいから、南海」

「うちの旦那も言うてたで」

静江は笑って言ってきた。

「阪神にあんなピッチャーいればなあつて」

阪神ファン名物のぼやきもこの時代から健在であった。そう言う  
ては溜息をつくのだ。ただし巨人の選手相手には敵意を剥き出しに  
する。この時代では川上や千葉、別所がその対象だった。後にそれ  
が王や長嶋になっていくのだ。あるタレントは子供時代あまりに長  
嶋に打たれて負けるので彼を殴ってやろうと球場の隅で待ち構えて  
いたがそのオーラに圧倒されて動けなかったという。

「いつもな」

「こっちは切実やね」

稲尾はパリーグである。この差がまた出ていた。

「南海に来るのを待っただけやけれどね」

「来るやるかね」

「運がよかつたら。それか鶴岡さんが見つけてきたらや」

康友に対して語ったのといささか被っていた。

「どうなるか」

「まあこっちも同じや。もう一人小山が来つかもて言うてるよ」

当時の阪神のエースである。その抜群のコントロールで知られ精  
密機械という仇名を持っていた。押しも押されぬ大エースである。

「そういうことやさかい」

「気長にいこか」

これで彼女達の話は終わった。実はこの時鶴岡は大物を狙ってい

た。その大物こそがあの杉浦忠なのであった。

杉浦が南海に入る、それを聞いた康友はかなりはしゃいでいた。  
「凄いかも知れんで」

新聞を読みながら芳香に語る。朝からこの調子であった。

「杉浦や、杉浦が南海に来るんや」

「そんなに凄いいん？その人」

「凄い」

彼は断言してきた。

「立教大学のエースやで。巨人に行った長嶋と並ぶスターや」

「へえ」

「その杉浦が入った。これはでかい」

得意面々で語る。

「優勝するかもな」

「ほなこれで一安心やね」

「いや、わからへん」

だが彼はこう言っつて首を横に振ってきた。

「まだな」

「わからへんのん」

「そや。確かに人も揃ってる」

当時の南海は所謂四〇〇フィート打線だ。頭角を表わしてきた野村克也を中心に攻守が揃っていた。だがそれでもわからないと言っているのである。

「西鉄は強い」

そのことが骨身に滲みていたのだ。

「杉浦が本物やっつたらいけるやるけど」

「けど今喜んでるやん」

「それはな」

それ自体は認めた。

「そつやけどそれだけやないから」

「安心はせんわけやね」

「それでも。優勝したら」

「どないするん？」

「御堂筋や」

また御堂筋を出してきた。

「そこ行くで。ええな」

「お酒も用意してやね」

「わかってるやないか」

芳香のその言葉に笑顔になった。

「そういうことや。それでええな」

「わかったで。その時はね」

「さて、どうなるかな」

これからのことに想いを馳せてきた。

「南海も杉浦もな」

何だかんだで楽しみにしていた。実際に杉浦は入団したその年から活躍した。いきなり二七勝をあげ新人王になった。しかし南海は優勝できなかった。

この年のシリーズは伝説となっている。三連敗の後の四連勝、西鉄は稲尾の恐るべき力投で日本一になった。まさに鉄腕であった。

「凄いわ」

これには康友も言葉がなかった。

「稲尾は凄いと思ってたけどここまでとは思わなかった」

「街でもこの人の話ばかりやで」

芳香は家に帰ってラジオで話を聞く康友に対して言った。

「稲尾稲尾でな」

「当然やろ。こんなのできへんわ」

唸っていた。

「最高のピッチャーやな。杉浦も凄いけれど」

「それ以上って言いたいんやな」

「そや。これは有り得へん」

「こつまで言っ」

「最強のエースここに在りやな」

「けれどあんた」

唸る康友に対してそつと言ってきた。

「何や？」

「世の中上には上がおるで」

実はこの言葉には真意があつた。

「そやから」

「杉浦が上いくつてことか？」

「そうかも知れんやん」

「そやつたらええけどな」

あまり期待はしていない顔であつた。

「けど稲尾以上は。やっぱり」

「期待はできるやろ？」

それすらもない彼に対して言うのだった。

## 第十章

「それでも」

「じゃあ来年期待してみようか」

その言葉に乗った。いや、芳香が乗せたのであった。これは計算してのことだった。

「それもそやな。期待するのはできる」

「そうそう」

にこりと笑って夫に対して述べる。

「そやで。それでもあかんかったら」

「運がないと思って諦めるだけやな」

「何やったらお参り行つて来たらどうなん？」

「お参り？」

「住吉さんでも」

住吉神社のことである。関西で最大の神社であり毎年新年にはお参りでごつたがえす。大阪人にとっては大阪城と並ぶ誇りである。

「願かけに」

「あそこ勝負事やったかな」

「どうでもええやん。神様は同じやで」

かなり強引だがそれでも芳香は言った。

「行かんより行く方がええし」

「そやな。じゃあ日曜にでも行くわ」

「一緒にどや？」

またくすりと笑って声をかける。

「久し振りに二人で」

「アホ言つな。デートする歳かい」

康友は芳香のその言葉に笑った。だが悪い笑いではなかった。その証拠に彼はすぐにこう言ってきたからだ。

「けれど。ええかもな」

「たまにはな」

芳香も言ってきた。

「ええやる。そやから」

「わかったわ。じゃあ日曜な」

康友も何処か照れ臭かった。この時代はまだ硬派という言葉が強く残っていた。それが少しずつなくなっていくのも感じられていたが。

「行くで」

「うん」

こうして二人は日曜に住吉大社にお参りした。天下茶屋からは近いので歩いていった。実際に歩いて行けない距離ではないのだ。自転車だともっと速いがこの時代自転車は高く家に一つといったところだった。

並んで西成から住吉の道を歩く。康友はその中で芳香に声をかけてきた。

「なあ」

「何なん？」

「こうして二人歩くのってあれやな」

彼は道をてくてく歩きながら彼女に声をかけてきたのだ。秋の空気が少し肌寒かった。

「結婚する前以来やな」

「結婚して暫くはこうして歩いてたやん」

「そやったか」

「言われても今一つ記憶にない。」

「覚えてないわ」

「そうやで。大阪球場かて歩いて行つたやん」

「歩いて行けん距離やないからな」

天下茶屋から歩いて暫くして大阪球場のある難波だ。意外と身近にあるものなのだ。

「そやから」

「電車よりこっちの方がええねん」

芳香は楽しそうな顔で康友に言ってきた。

「何でや？」

「またとぼけて」

ここで夫の肘を自分の肘でコツンとしてきた。

「決まってるやろ。あんたと一緒やからや」

「おいおい、またそんな子供みたいなこと言うて」

その言葉を聞いてかなり恥ずかしくなった。

「どないしたんや、ホンマに」

「あのな、あんたやからや」

今度は夫にこう述べてきた。

「あんたやから」

「一緒におるんか？」

「そや。あんたにとつては南海があれやろ」

今から願をかけにいく相手を話に出してきた。

「離れられん相手やな」

「ああ」

それを自分でも認める。実際に彼にとつては南海が絶対であった。これなしではいられなかった。

「子供の頃からや」

上を見上げて言った。秋の青く高い空がそこにある。雲もまばらで綺麗な空だった。

## 第十一章

「野球は南海やった。戦争に行っても南海の話集めてたわ」  
「ほら、そやる？」

芳香は康友のその言葉に突っ込みを入れる。

「それと同じやねんよ」

「御前にとっては何しか」

「そや」

にこりと笑って言う。

「一生な。死ぬまで」

「嬉しいのう」

女房のその言葉に顔を緩ませる。

「そこまでわしのことを想うてくれるんか」

「うちが勝手に想うてるだけやで」

「いや、それでもや」

それでも彼は嬉しかった。そこまで想われて嬉しくない男もいない。

「わしはな。南海だけを見て楽しんでたけど今こうして御前がおつて」

「どうなん？」

「最高の気分や。そっぴや御前と会ったのは」

馴れ初めのことも思い出した。それは難波のことだった。

「あそこやったか。難波の喫茶店で」

「蝶柳やね」

難波にある喫茶店だ。少し和風も入っていて何か訳ありのような夫婦がやっている店である。恰幅のいい奥さんが評判の店である。

「御前があそこでウエイトレスしててな」

「それで知り合つて」

それが二人の出会いだったのだ。客と店員から二人ははじまった。

何度か通っているうちに話をするようになりそして、というわけであつたのだ。

「そやつたな。覚えてるやろ」

ふとまた話を出してきた。

「一緒に食べた洋食」

「うん」

「あれもよかつたな。エビフライが」

二人で最初に食べたのはそれであつた。戦争が終わって暫くでまだ苦勞していた頃だがそれでも何とか食べたものである。

「あれは美味かつたな」

「ソースも濃くて」

「何度も難波を二人で歩いてな」

「楽しかつたで」

そう言葉を交あわせる。

「あの時」

「大阪球場も行ってな」

「見出しの男が打つてな」

岡本伊三美である。南海の名セカンドでありここぞという時に打つて新聞の見出しを飾つたことからついた仇名である。後に近鉄の監督になって多くの選手を育てている。育成者としても手腕があつたのは彼もまた鶴岡の弟子だったからであろうか。

「覚えてるわ」

「懐かしいね。ホンマに」

「そして今こうして一緒に歩いて」

「なあ」

康友はまた芳香に声をかけてきた。

「忙しいけれどな。来年南海が日本一になったら」

「また一緒にやね」

「そや。デートは」

康友は前を向いていた。そのまま女房に言う。

「また二人で。どや？」

「ええね」

芳香はその言葉にこりと笑ってきた。

「ほなうちも願掛けせなあかん」

「住吉さんにやな」

「そや。杉浦さんが頑張るように」

「さて、やってくれるかな」

康友はその細くなった目で述べる。

「杉浦は」

「その為にも願掛けらんやん」

康友の横で言う。

「そやる？」

「けれどもう一つ願掛けたくなったで」

「何掛けるん？」

「御前とずっといたってな」

そのにこりとした笑みで語る。しかし前を向いたままなのはどう

にも照れ臭いからであろうか。

「わしには過ぎた女房やからな」

「ちよつと、そんなん言うたら」

今度は芳香が照れ臭くなる番だった。道で顔を赤くさせていた。

「恥ずかしいやん、ちよつと」

「わしかて恥ずかしいわ」

「それでもな」

「そうなん」

「御前のことも願うで」

その気持ちは固まっていた。

「それでええな」

「じゃあうちも」

芳香もそうするつもりになっていた。夫婦一緒であった。

「一緒をお願いするわ。恥ずかしいけど」

「ああ」

康友はその言葉に頷く。二人は笑顔で住吉までの道を歩いていたのであった。二人のささやかな、久し振りのデートであった。

願掛けから一年後、驚くべきことになった。

「勝ったわ」

ラジオから胴上げの音が聞こえてくる。後楽園で勝利を収め今南海ナインが勝利に沸き返っていたのだ。

杉浦の四連投四連勝の結果だった。昨年の稲尾のそれを思わせる偉業だった。今その彼が高らかに空を舞っていた。全ては杉浦の力によるものだった。

「これでうちの人も」

康友の喜ぶ顔が見える。そして。

「御堂筋やな」

デートの約束を思い出す。それが彼女にとって大きな力になった。いい女房になるのは何故か。それは夫への気持ちだった。それを持っている彼女は確かに過ぎた女房であったしそれを向けられている康友は幸せであった。幸せな夫婦の話であった。

幸せな夫婦

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7772c/>

---

幸せな夫婦

2008年8月29日19時15分発行